「東日本大震災」被災支援 NEWS No.32 2012.3.18（隔週配信）
〒330－0844 さいたま市大宮区下町 3－39　関東教区事務所　kantou@desk.email.ne.jp　発行者　飯塚拓也

「永遠の命にいたる道」

―ルカによる福音書１０：２５～３７－

秋山　徹（教区総会議長）

主イエスの語られたよきサマリア人の譬えは、律法の専門家が主イエスに、「何をしたら永遠の命を受け継ぐことができますか」と問うところから始まっています。この問いは極めて現代的な問いでもあります。あれほどの地震や津波、放射能汚染の出来事を経験し、大きな痛手を負っている現在の日本において、この問いは現実性を帯びています。われわれは何を記念すべきか、教会は何をなすべきか、すべての問いは、この「永遠の命を受け継ぐ」という課題と関わっています。何と、律法の専門家は、この問いに対する答えを既に持っています。「主なる神を愛すること、隣人を自分自身のように愛すること」です。驚くべき明知と深みに達した答えです。ところが、律法の専門家は、「ではわたしの隣人とは誰ですか」と問うのです。どうしてこんな問いを発しなければならないのでしょう。ここにはわたしたちにも共通する壁、命にいたる道を阻む深淵があります。現在、至る所で「絆」という言葉が盛んに語られます。しかし、どのように絆を持てばいいのか、だれと絆を結ぶべきか、言葉の前に立ちつくしている状況を、わたしたちも経験しています。主イエスのよきサマリア人の譬は、この閉塞状況を打ち破り、永遠の命を受け継ぐ道が示されるのです。

「ある人がエルサレムからエリコに下って行く途中、追いはぎに襲われた。追いはぎはその人の服をはぎ取り、殴りつけ、半殺しにしたまま立ち去った。」突然の思わぬ災害のために裸になり、半殺しの目にあっている人のことから話は始まります。そして、祭司とレビ人は、道に倒れている人を見ながら、「道の向こう側を通って行った」のです。しかし、サマリア人は、旅の途中で通りかかったときに、道に倒れている人を見かけて、強く胸を打たれて、近寄って行きます。まことに心のこもった一連の親切な行動が続きますが、このサマリア人と追いはぎに襲われた人との絆、関係性は、旅人性、偶然性、無縁性（敵対性）によって特徴づけられるものです。地上を旅するわたしたちが、誰とでも、どこでも、起こりうる絆です。この隣人となる行為は、ただ一度、たまたま、その時に出会った人を一人だけ助けたに過ぎません。こんなことが、死に揺り動かされる人類を救い、永遠の命を受け継ぐ行動となるのでしょうか。それは、人に対してした親切な行為であるにすぎません。これが永遠の命を受け継ぐ行為であると約束してくださるのは、主ご自身なのです。そこには、主の死による贖いが必要であり、主の執り成しがなければなりません。しかし、主は約束してくださるのです。「行って、同じようにしなさい」、と。

東日本大震災を経験し、その痛手の中から立ちあがるために懸命に生きている教会とわたしたち、永遠の命にいたる扉は、すぐ近くにあることに気づかされます。主の教会が一つになり、永遠の命を受け継ぐ生きた働きができるように、共に励みましょう。きのうも、今日も、世の終わりまで、いつも共にいます、主にあって。

関東教区茨城地区「東日本大震災」被災地・被災教会を覚える主日記念礼拝の報告

久保田　愛策（茨城地区長、教区被災支援委員、鹿島教会）

あの日からちょうど1年の2011年3月11日は日曜日でした。それぞれの教会で主日礼拝を守った後、14時から筑波学園教会を会場に1年の記念礼拝を守りました。茨城地区の諸教会、また関東教区内からも77名もの方々が集い、1年の記念の日のために共に礼拝を守ることができました。

今回の礼拝にはいくつか特筆すべき事柄がありました。一つは中越地震の時の記念礼拝の時に鳴らされたあの鐘の音が、またつくばの地で鳴らされたということです。多くの方々の支援の祈りをもって再建した新潟地区の諸教会と同じように、被災地にあって茨城地区の諸教会がこの鐘の音によって一つとなり、新たに立ち上がっていく未来を予感させられました。二つ目に、兵庫教区より信徒常置委員の村瀬さんと教職常置委員の古澤牧師がこの記念礼拝にご出席してくださったことです。自らが今から18年前に被災し、その痛みをもち続けているがゆえに私たちに痛みに連帯してくださったことを強く感じました。礼拝後には兵庫教区を代表して挨拶をいただき、私たちはこの苦難を共にした仲間であることを強く感じ、大変心強く思いました。三つ目に飯塚牧師のお話の中で、茨城地区が被災地区であるというメッセージをいただいたことです。茨城地区の多くの方が今回の震災で多くの困難の中にあります。しかし茨城地区の多くの方々が、自分たちは被災地区であり、被災者であるということを言えない雰囲気が震災後ずっとあります。一つには私たちよりも辛い状況がマスコミより伝えられている東北3県の存在があります。東北地方のことを思うと私たちは自分たちが被災者であるということ、またそれを公言することを憚られます。自分たちはまだましであり、弱音を口にしてはいけないという思いになるのです。しかし自分たちがこの未曾有の震災に遭遇したことを自覚する時に、私たちにその事実が具体化し、その中で私たちが本当の意味での救いを体験し、自らの心が熱く燃える体験をすることを教えられました。

私たちの復興は道半ばです。まだ自分たちの生活が今後どのように進展していくか全くわかりません。しかし今、確信をもって言えることは、主が私たちをいつも導いてくださっているということです。それは私たちの思い通りになるということではありません。祈りの通りになるということでもありません。しかし主の御心が実現することを信じる中で、自分たちが大きな御手の中にあり、その私たちが連帯することによって、より具体的により豊かに主の御心が実現することを私たちは信じています。茨城地区の行く手にはまだまだ多くの困難がありますが、きっとこの先に神様の祝福があることを今は信じて歩んでいます。

神様の救い、助けを確信して

西川　幸作（新潟地区被災支援担当、三条教会牧師）

2012年3月11日、東日本大震災から1年のこの日、主日礼拝が各教会にて守られた後、午後3時より新潟地区総会が東中通教会にて開催されました。その開会礼拝は「東日本大震災」被災地・被災教会を覚える主日記念礼拝として守られました。司式は新潟地区長の新井純師、説教は関東教区総会議長の秋山徹師でした。新潟地区内では実際に大きな被害に見舞われた教会はなかったのですが、集われた人々はしばしの間、教区内の他教会の被害状況と復興への歩みについて改めて考え、祈りました。又、地区として支援物資、支援募金、そしてボランティア活動を行い、被災地、被災教会と共に歩ませて頂いたことを振り返るひとときでもありました。

聖書箇所は「良きサマリア人」の箇所でした。秋山師はこの箇所から被災地、被災教会の歩み、支援活動の大切さを語られました。前述した通り、主に支援活動を担わせて頂いた新潟地区にとっては大きな励ましのメッセージとなりました。

礼拝の中で、詩編46編2～12節が交読されました。「神はわたしたちの避けどころ、わたしたちの砦。苦難のとき、必ずそこにいまして　助けてくださる。わたしたちは決して恐れない。地が姿を変え　山々が揺らいで海の中に移るとも。・・・万軍の主はわたしたちと共にいます。ヤコブの神はわたしたちの砦の塔」。共に唱和することで、神様からの救い、助けが必ずあることを確信することが出来ました。必ず大きな喜びが与えられる幻を見た礼拝のひと時でした。